東方好嫌意～真録～

小町通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方好嫌意～真録～

【Ｎコード】
Ｎ５４４０Ｙ

【作者名】
小町通

【あらすじ】
東方好嫌意書き直しバージョン
特に死んだわけでもなく何かを特別助けたわけでもない主人公が幻想郷へ行く話。

始まり

君たちには楽しみにしている漫画などは無いだろうか？
月に一回、週に一回のペースで売られる、雑誌などでもいい。
もちろん、俺にもある。
気分は最高でコンビニから買ってきた漫画雑誌をこれまた最高の気分で読んでいる。
その時の気温はついうたた寝してしまう様な最高の気温で、案の定何時の間にか寝てしまった。
これが俺の過ごしていた最高の時間であった。
あの時うたた寝しなければ、あの日漫画雑誌を買わなければ。
幸運の後はそのぶん不幸が来るらしいが此処まで露骨な出来事は下手な二次創作にしか無いであろう。

目が覚めたら、見知らぬ地にいるなんて事は。

原因は全て湖から

此処は何処だ、こんな事を考えたのは子供の頃にデパートではしゃぎ過ぎ、迷子になった時以来だった。
今の俺は他人から見れば落ち着いている様に見えるだろう。
まぁ実際は心臓は嫌でも聞こえるくらいドクドクと言っているし、まわりを見渡す時はキョロキョロと効果音がなってもいいくらい焦っている。
そうやって目をぐるぐるさせながらでも分かった事は、此処は湖の横の広場の様な場所みたいだ、という事は此処に遊びにくる子供などに会う確率が高いはずだ。
少なくともまわりの森で彷徨うよりはマシなので、丁度端の方にあった切り株に腰をかける。
何だかさっきまでの出来事で無駄に体力を使った気がする…
うん、この切り株は横になれそうなくらい大きい、少し休むか…

今日もいい天気だ！
あたいは大ちゃんといつものみずうみのひろばで、あそぼうと大ちゃんをつれてとんでいた。
「チルノちゃん待ってよー」
ふふん、さいきょーのあたいの早さにおいつけない見たいね！
そうやっていつもと同じようにおいかけっこしながらとんでいると、みずうみまでは早くついた。
けどあたいは何かいわかんをかんじた、そのかんじのげんいんはすぐに分かった、もうつくづくあたいったらさいきょーね！！
そのいわかんは何だったんだって？
しょうがないわね！さいきょーのあたいがおしえてあげるわ！

じつは…外の人間だったの！
大ちゃんはあわてながら近づくあたいを止めてたけど、あたいピーンときたわ！
こいつ、あたいのさいきょーの弟子にしてあげるわよ！

チルノと大妖精

うーむ……？
……いかん、寝てたようだ、ん？何か冷たい物が？
「や、やめようよチルノちゃん！どんな人か分からないよ！」
一番先に目に入ったのは、緑の髪の女の子だったワンピースが良く似合っている。
ただ、お兄さんは君の発言で少なからず傷ついたよ。
二番目に目に入ったのは…羽だった。
いやいや、いくら訳が分からなくても羽はないだろ…
妖精じゃあるまいし。
「あんた！はやくおきなさい！ほらほら！」
もう一人いたようだ、こちらは青色の髪に青と白のワンピースで涼し気な子だ。
うん、まあ羽はついていた俺は一体何処に来たってんだ。
うんうん唸っていると青の子がこう言った。
「ようやくおきたのね！いい？よろこびなさい！あんたをあたいの弟子にしてあげるわ！」
…えっ？「今なんと言いました？」
「だから、あたいの弟子にしてあげるって言ってるでしょ！ほんとばかね！」
口に出ていたようだ、いやいやそうじゃなくて弟子？　何の話だよ？
「チルノちゃん、この人ショートしちゃってるよ…」

大丈夫ですか？と声を掛けてくれる緑の子。
今は君だけが救いだよ…

話を聞くと、俺が外から来た人間だかららしい。
此処で緑の髪の子…大妖精と言うらしい、の補足が入る。

此処は幻想郷と言う所、分かりやすいように異世界と例える、その異世界の外から来たから外の人間と言う訳らしい。

ここの成り立ちなどを詳しく聞こうとしたが、大妖精にも良く分からないらしく、人がいる所を聞くと人里があるらしく人里への安全な道を教えてもらった。

横で青い子…チルノが弟子やら子分やらうるさかったが、最後は「ししょーのはなしを聞かないやつははもんだー！」と何処かへ飛んで行ってしまった。

大妖精が苦笑いしていたのを見て、俺もつられて苦笑いしてしまった。

人里へ～恐怖！謎の球体Ｘ！～

大妖精はその後チルノを追いかけていった。
その時に「気軽に大ちゃんって言って下さい！」と笑顔で言われ、少し道を踏み外しそうになったがまだロリコンではない。

と言うか、こんな異世界に来ている時点で現代人としては踏み外しているのかもしれない。
皮肉な事を考えていると割と整備された道に出て来た、教えてもらった道は合っている様だ、若干の不安は綺麗に無くなり鼻歌でも歌いながら歩こうかと思っていたら。
「わはー」
目の前に黒い球体が現れた。

「どうしたものか…」
その球体は右へ左へふらふらと動いていると言うか、彷徨っていた。

「むー？　人間かー？」
気付かれたのかと思い少し身構えたが、それでもふらふらとこちらへ来る様子は無い。

「もー！　どこなのだー！　そうだ！　暗闇を解けばいいのだー！」
て言うかそれは自分で解けるのかよ。

「ねぇ、貴方は食べてもいい人類？」
あの球体から出てきたのは金髪のショートで赤いリボンを付け、黒い服を着た女の子。

「これから人里に行くからダメだ、なんならお前もくるか？」
人喰いだかカニバリズムだか知らんが、奇奇怪怪、奇妙で非常識な事にはもう慣れて来た。
聞いて来たと言う事は否定すれば見逃してくれるのだろう。

「うー…人里の守護者が怖いから、私は行かないのだー」
そういいながら、おでこを押さえながら飛んで行った、なんでおでこを…？
暫く見ていたら黒い球体が木にぶつかっていた、見なかった事にしよう、うん。

人里と優しさと

あの子と別れて十五分くらいたっただろうか、人里が見えてきた。
入り口にいた門番の人…名前は鈴木らしいが、彼に話をすると快く迎えてくれた、彼も外の人間らしい。
こんなんで人里の警備は良いのかと聞いてみると、まず妖怪などは人里を襲ってはいけないらしく、彼の上司にあたる妖怪の賢者…八雲紫に外の人間で人里へ辿り着いた者を手厚く歓迎しろと、そう言われているらしい。
…もしかしなくても俺はかなり命の危機であったのでは、そう思っていると顔に出ていたのか鈴木さんが励ましてくれた。
此処まで来たら安全だよ、君にも能力があるかもしれない、そうだ明日博麗の元へ連れて行こう。
流されるままに明日の予定が決まってしまった、まぁこのままでも行く当てすら無いし、途方にくれながら知らない世界に残されるのは堪える。
鈴木さんは寺子屋へ行って見てその後、家に来なさいと優しく言ってくれた。
彼も最初は俺の様な気持ちだったのだろう、俺もあの様な人になれるだろうか？

彼からもらった地図を頼りに寺子屋へ辿り着いた。
騒がしくも楽しそうな子供の声が聞こえる、もうそろそろ休み時間の様だ、先生と呼ばれる人…上白沢慧音という人に会うには丁度良い頃合いらしい。
人里で一番頭の上がらない人物になるとは、この時には知る由も無かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5440y/

東方好嫌意～真録～

2011年11月29日23時53分発行